

# 自己の生き方を見つめ、互いに高め合う生徒の育成 ～ 新聞を活用したかかわり合い活動を通して ～

新潟市立白根北中学校

## 1 N I E実践のねらい

### (1) 白根北中学校の教育理念とのかかわり

今日の急速な社会の変化に対応し、生徒に「生きる力」を身に付けさせることが必要である。「生きる力」とは何か。一言で言えば将来にわたってよりよく判断できる力と考えられる。言い換えれば「総合的な人間力」、世の中できちんとやっていける力、自分の人生をきちんとやっていける力と捉えることができる。この「生きる力」が第2期教育振興基本計画においては、多様で変化の激しいこれからの社会の中で個人の自立とさまざまな人々との協働に向けた力や困難に直面しても臨機応変に行動する力など「社会を生き抜く力」と定義されている。この力を身に付けさせるには、キャリア教育の視点を欠かすことはできない。そこで、N I E実践の委嘱を受けたことを一つのきっかけに、キャリア教育の視点を大切にしながら、新聞を活用する教育活動を通して「生きる力」を身に付けさせることを、全校をあげて目指すことにした。

### (2) 白根北中学校の教育課題と教育実践とのかかわり

平成27年度 新潟市生活・意識調査の結果から白根北中学校の生徒は、全般的に「自己有用感」および「自尊感情」に関わる質問項目において、肯定的な評価を寄せる生徒の割合が低いことがわかった。そこで教育活動全体を通して、生徒同士のかかわり合いの中で『自己有用感の醸成』『自尊感情の高揚』を重点として取り組む必要があると考えた。この教育課題の解決に向けてもキャリア教育の視点を大切にしながら日々の教育実践を目指す必要がある。そしてN I Eの実践委嘱を受けたことにより、新聞を活用することで、生徒同士のかかわり合いをより一層深め、『自己有用感の醸成』と『自尊感情の高揚』を図る教育実践を試みることにした。

### (3) 目指す学校像とN I E実践とのかかわり

白根北中学校の目指す学校像は

- 一人一人の生徒が楽しく安心して学校生活を送ることができる学校
- 仲間と協働して自らを高めることができる学校
- 自分の可能性に挑戦し続けることのできる学校 である。

とくに2つ目の学校像については、かかわり合って互いに認め合うことができる関係の中にこそ、共に知性の高まりが期待できる。3つ目の学校像については、自分の力を信じ常に前向きに挑戦し、取り組んでこそ夢の実現に近づくことができる。そこでNIE実践委嘱を受けたことを機会に、新聞を授業に取り入れることで、「かかわり合って互いに認め合う」姿、「自分の力を信じ常に前向きに挑戦する」姿を目指すことにした。

また、白根北中学校の教育実践の基本は「一人一人の生徒が自己を厳しく見つめ、生徒の「意欲的な参加」を全教育活動の中心に据える」ことである。具体的な方策の1つとして、生徒が新聞記事とかかわり、自己を厳しく見つめ、自分を高め、視野を広げ、社会づくりに貢献するための素地を養うことを目指す。このことを通して自己有用感の醸成、自尊感情の高揚を感得させたいと考えた。

#### (4) NIE実践で生徒に身に付けさせたい力

キャリア教育で身に付けさせたい力には、4つの基礎的・汎用的能力がある。そのうち、特に「自己理解・自己管理能力」および「課題対応能力」をNIEによる教育実践で身に付けさせることにより、「自己有用感の醸成」および「自尊感情の高揚」という教育課題の解決につながれると考えた。

さらに、この教育課題を解決することで、生徒は現代の日本が必要とする「社会を生き抜く力」を獲得できると考えた。

##### ○ 自己理解・自己管理能力

… 子どもや若者の自信や自己肯定感の低さが指摘されるなか、「やればできる」と考えて行動できる力

- 【具体的には】
- ・ 自己の役割理解
  - ・ 自己の動機付け
  - ・ ストレスマネジメント
  - ・ 前向きに考える力
  - ・ 忍耐力
  - ・ 主体的行動 など

##### ○ 課題対応能力

… 自ら行うべきことに意欲的に取り組む上で必要となる力

- 【具体的には】
- ・ 本質の理解
  - ・ 計画立案
  - ・ 評価、改善 など
  - ・ 課題発見
  - ・ 実行力

## (5) 白根北中学校におけるN I E教育実践の提案

自校の教育課題の解決に迫るために

各学年で、キャリア教育の基礎的・汎用的能力（特に自己理解・自己管理能力、課題対応能力）を育成することを通じて、『自己有用感の醸成』『自尊感情の高揚』を図る学級活動（進路指導、キャリア教育）を行う。

そのために、有効な新聞活用のあり方を探り提案する。

## 2 本年度の実践の概要

### (1) ツイートボードの設置（継続・発展）

当校の生徒は学年が上がるにつれSNSの利用率が高く、通信機器を使って一言述べるという経験のある生徒が多い。これを「新聞記事に対して一言」と設定した。学年問わず通行量の多い廊下に生徒の関心を呼びそうな（関心をもってもらいたい）記事を提示し、新聞記事に対する関心を高めることをねらった。さらに、生徒や教職員が記事の内容に対する意見や感想をカードに記入して、記入者自身が掲示した。自分の考えを述べることを苦手とする生徒が多い中で、多くの生徒が興味をもちそうな記事に対し、SNSに投稿するような感覚で手軽に記入と掲示を行った。そして仲間に自分の考えを発信したり、仲間がどのようなことを感じているかを知ったりする機会とした。

実践1年目は、教師が一定期間をおいて掲載記事を更新していき、タイムリーな記事に対して実践期間中は一人1回以上ツイートするようにはたらきかけた（生徒と職員によるツイートカードは、のべ約300枚）。短い文章で感想を発信することに抵抗が少ない若者の特性にマッチして、新聞に触れる機会が少ない生徒たちにも、新聞に気軽に触れるという「裾野を拡大する」という点では大きな成果を残すことができた。実践2年目は、新聞記事の選定と更新を生徒にゆだねた。ツイートボードを各学年1枚ごとに割り当て、各学年ごとに運営させた。その結果、生徒が嬉々



として記事を選定し、かつ仲間の選定した記事に対して積極的にツイートカードを掲示する姿が見られるようになった。足を止めてツイートに目を通す生徒も増えた。ツイートカードに記入し、掲示する生徒は少しずつ増えてきており、現在は新聞記事を通して学年や全校生徒の意見交流の場となった。

## (2) 生き方に関する「新聞記事の紹介」と交流（継続）

教師が「人」「仕事」「生き方」について深く感動した（生徒に紹介したい）新聞記事を専用の台紙に貼り、コメントをつけてNIEコーナーに掲示し生徒に紹介した。この記事紹介に対する投函箱を用意し、生徒からの自由な感想や意見を募った。生徒からの感想や意見の投函に対し、記事を担当した教師が生徒にコメントをつけて返却し、感想・意見の交流の場とした。



取組2年目は、1年目ほど生徒からの投函数は多くはなかったが、「〇〇先生の紹介の記事を見ましたよ」「あのひと、僕も好きです」など、直接的に教師にコメントを寄せる生徒の数は大きく増えている。上記の(1)実践より更新が少ないことは課題であるが、生徒にとっては「その人物の記事を選んだ、その教師の生き方に会わせる」よい機会となった。

## (3) 授業実践

### ① 授業実践（実践2年目）に関わる取組

実践テーマ 「 自己の生き方を見つめ、互いに高め合う生徒の育成 ～ 新聞記事を活用したかかわり合い活動を通して ～ 」			
4月	5日(火)	職員研修	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実践テーマの確認の確認</li> <li>・委嘱2年目の授業実践の方向性確認</li> <li>・学校経営方針とNIEの関連の確認</li> <li>・NIEで付けさせたい力の確認</li> <li>・総合的な学習の時間、道徳において、関連する題材を中心に、授業実践の積み上げ</li> </ul>

5月	10日(火)	NIE推進委員会 ・ 職員の役割分担を確認 ・ 研究協議会(11/18)の運営方針の確認
5月	23日(月)	職員研修・授業実践(11/18)までの流れの確認
6月		上記実践(1生徒によるツイートボード)の運営開始
8月		ネットワーク部会(授業実践)指導者の決定
9月	26日(月)	職員研修 ・ 実践発表会当日の日程, 準備活動の確認 ・ 実践発表会に向けて授業者およびプレ授業者および指導案作成者の決定
	27日(火) ～	各学年ごとに, 授業構想カードをもとにした授業案の作成
10月	3日～7日	校内NIE推進委員会による授業案検討
	18日(火)	第3学年 プレ授業および協議会 指導者 新潟青陵大学 教授 岩崎 保之 様
	19日(水)	第1学年 プレ授業および協議会 指導者 新潟市立大江山中学校校長 佐藤 宏欣 様
	25日(火)	第2学年 プレ授業および協議会 指導者 新潟大学教育学部 附属新潟中学校 副校長 津野 庄一郎 様
	26日(水) ～	各学年ごとにプレ授業における課題を解決するために, 授業構想カードの修正・改善と新たな授業案の検討
11月	7日(月) ～ 11日 (金)	要項の作成と研究会に向けての最終準備・点検 校内NIE推進委員会による授業案検討
	18日(金)	ネットワーク部会(NIE実践・研究発表会)開催 分科会指導者 新潟青陵大学 教授 岩崎 保之 様 新潟市立大江山中学校校長 佐藤 宏欣 様 附属新潟中学校 副校長 津野 庄一郎 様 全体会指導者 NIEアドバイザー 津野 庄一郎 様 新潟県NIE推進協議会会長 伊藤 充 様
12月 ～ 3月		「実践報告書」の作成・提出, 日本新聞協会へ「実践例報告」の提出

## ② 授業実践の実際

### 【 第 1 学年 】 自分を「見つめる」

…「職業講話」「職場体験」との関連で

『 なぜ働くのだろう 』 授業者： 教諭 長谷川 和弘  
《 授業の見どころ 》

様々な人の職業を紹介する特集連載記事を使用することにより、それぞれの人物の働く理由や仕事に向かう気持ちを考えることを通して、どの人物にも仕事に対する共通した価値観（仕事に向かう思い）があることを理解する。

《 使用した記事 》 「はたらく 羽ばたく」(新潟日報：定期連載)  
{ 左官職人，日本料理人，能生漁港最年少の船長，大動物の獣医師 }

### 【 第 2 学年 】 視野を「広げる」自分を「高める」

…「社会参加・貢献活動」「自己の生き方・進路」との関連で

『 視野を広げ，社会づくりの一員であることの認識を深めよう  
～ より良い学校づくりと生徒会選挙 ～ 』  
授業者： 教諭 嵐田 浩二

《 授業の見どころ 》

新たに選挙権を得た10代の若者の思いを紹介した記事を使用することにより、若者の社会参加の気持ちや社会に対する責任を考えることを通して、職業や社会に対する視野を広げ、望ましい職業観や社会観を育成する。

《 使用する記事 》  
「10代 1票に思い」(読売新聞：2016年7月11日(月)掲載)

### 【 第 3 学年 】 将来に向けて「歩み出す」

…「進路選択」との関連で

『 自分の「生き方」を見つめる 』 授業者： 教諭 山口 俊介  
《 授業の見どころ 》

レギュラーでない高校球児の生き方を紹介するコラムを使用することにより、それぞれの人物の、周囲との調和を図りながら前向きに決断し、努力する姿に触れることを通して、生徒に自己実現を目指して前向きに努力する心を育成する。

《 使用する記事 》 「はま風」  
(朝日新聞：夏の甲子園大会開催時  
連載コラム 2016年8月15・17・19・21日 朝刊 )



〈 第 2 学年 授業の様子 〉



〈 第 1 学年 授業の様子 〉



〈 第 3 学年 授業の様子 〉



〈 11/18 研究協議会の様子 〉

### 3 実践の成果

#### (1) 明らかになった新聞を授業に活用する効果

- 教師が、記事の提示の方法に工夫ができる
  - ・・・教科書や副読本に閉じこもりがちな授業から脱却できる
- 様々な考えがあることを知り、自分の考えを持たせられる
  - ・・・生き生きとした授業が実現できる
- 問題意識（自分と社会とのかかわり）の醸成ができる
  - ・・・学習意欲と学ぶ力の育成

とくに、キャリア教育の視点とのかかわりで

- 学習内容や生徒の実態に適した記事が選定できる



- ・ 記事に登場する人物の思い・生き方に出会わせることができる
- ・ 記事を書いた記者の思い・生き方に出会わせることができる
- ・ 記事を選んだ教師の生き方に出会わせることができる

(平成27年度 白根北中学校N I E実践の校内研修における  
新潟県N I E推進協議会会長 伊藤 充 様 からの指導による)

## (2) 授業実践を通しての成果と課題

平成28年度の授業実践は、第1学年では自分を『見つめる』、第2学年では視野を『広げる』自分を『高める』、さらに第3学年では『将来に向けて歩み出す』をキーワードに、発達段階を考慮してキャリア教育で身に付けさせたい力を整理した。このことにより、3年間で系統的に深化・発展していくキャリア教育の意義を、全校（全学年、全職員）でとらえ、新聞記事を介在させながら、ベクトルをそろえて実践することができた。

授業実践では、第1学年と第3学年では、シリーズ（連載記事）となっている新聞記事から共通するものを探ることを通して、これからの社会が期待する生き方を考えさせる機会とすることができた。一方、第2学年では特集記事の中から共感するものを探り、今後の自分の生き方を考える機会とすることができた。この成果は、全学年において授業中の意欲的に学習に取り組む生徒の姿に現れ、さらに授業後、参会者や地域の方々より、「生徒の豊かな学びを保障した授業であった」という多くの意見が寄せられたことから、今回の取組のねらいを十分に達成できたと考える。

また、今回の実践研究に対して、全体会において指導者より

- 生徒の変容の分析と価値付け（質と量）がなされていること。
- 一時間の授業から脱却し、単元全体の構想が練られていること。
- まず新聞記事ありきの授業ではなく、目的と方法の整合性が図られていること。

(授業のねらい・学習内容に即して、適切な記事の選択がなされていた)

- 新聞の困難点(情報量・難解な語句)への対応がしっかりとられていること。

などの講評があり、白根北中学校の実践は、提案性が高い実践研究であるとの指導をいただいた。

今後は、N I E実践によるものだけでなく、教育活動全般を通じて、いかにして継続的に生徒の「自己有用感」「自尊感情」を高めていくかが課題となる。